■フォトエッセイ■

バザール 市場いろいろ

写真・文　阿部 尚史
Naofumi Abe

タブリーズ大バーザール内のシェイフカーゼムのサライ（商業施設）

旅に出たなら市場に足を延ばす人は多いはず。冷やかし半分で土産物の物色、人々の熱気を感じたり、商売の雰囲気、品物の傾向、さらにはやる気のない親父さんを観察したり、お茶を飲んだり、片隅で昼寝をしている猫を観察する…。まじめな研究でなくても市場探索の楽しみ方は無限である。

中東・西アジアでは、市場のことは「スーク」（アラビア語）、「バーザール」（ペルシア語）、「チャルシュ」（トルコ語）と呼ばれ、特にアーケード付の市場がよく知られる。ちなみに、「バザー／バザール」は市場の意味として日本でも知られるが、語源は前述のとおりペルシア語のバーザールである。この語は長らくペルシア語文化の影響下にあったインドでも用いられており、それがイギリス統治期に英語に取り入れられたのであろう。そして、日本にも英語経由で伝えられたと推察される。

筆者はこれまでイランの第二の都市というべきタブリーズを研究してきた。しばしばタブリーズの文書館で調査をしたが、なんと午後二時には閉館である。したがって、午後には大分時間があく。そういう時にふと訪れるのがバーザールである。タブリーズの大バーザールは世界遺産にも登録されており由緒正しい（もっとも現在の建物は古くない）。ふらふら歩いたり、買い物をするばかりではない。筆者はイスラーム法文書等を用いて一九世紀の地方有力者がどのように財産を保全していたのか研究していた。バーザール内の商業施設はしばしば有力者の財産として保有され取引されていたので、その対象物件を探すという楽しみがあった。むろん、年月を経たため、個々の店舗は商売替えしておりほとんど見つからないが、サライとよばれる店舗集合体にはまだ当時の名前を残すものがある。写真にあるシェイフ・カーゼムのサライは一八三〇年代初めに死去したファトフアリー・ベグ・ドンボリーという人物の遺産文書に記録されている。現在もその名を留めているのを見つけたときはもちろん大喜びであ

テヘラン・大バーザールの入り口（サブゼメイダーン）の賑わい

タブリーズ大バーザールの一角。脂肪の塊を売っている店がこんなに…

る。ここに隣接するサライ（当のファトフアリー・ベグのサライ）も当時の名前のまま残っていた。こうした「発見」は直接研究成果になるわけではないが、現在と一八〇年前を往来していることを実感できて大変満足である。文献中心に研究しているゆえに現在との触れ合いを味わうと喜びひとしおである。

もちろん、バーザールの楽しみ方は、古文書に書いてあることを確かめるだけではない。中東の人懐っこい人々との触れ合いは現地の情報、生活文化を知るうえでも大変重要であるし、なにより楽しい。こちらがちょっとペルシア語を話そうものなら（もっともタブリーズではトルコ語の方が好まれるが）、お茶を振る舞って、おしゃべりに付き合ってくれる可能性は高い。

中東研究関係者にはよく知られているのだが、こうしたアーケード付市場の機能はただの商業施設に留まらない。ちょっとウロウロしていると、モスクを見つけたり、様々な工房にも行き着いたりする。銅細工工房、絨毯工房、靴工房、染織工房、ナッツ類の加工工房などもある。生産拠点、倉庫機能も含んだ複合施設なのである。

バーザールはイラン国内でもその町ごとに特色がある。タブリーズのバーザールは日用雑貨、金細工、絨毯、靴、衣類の他、様々な食料品が売られている。羊の脂肪専門店があちらこちらにあり、脂肪の塊がつりさげられているのを見ると何とも不思議である。健康志向が強まる日本からすれば、こんなものを食べるのはと

エスファハーン・ナクシェジャハーン広場（世界遺産）。イラン暦新年のにぎわい。
広場を囲むアーケードの中はバーザール

タブリーズの大バーザールのとあるお店。居眠りするおじさん

クルド系住民が多く住むケルマーンシャーのバーザール。
この地方は、派手な布地（化繊だが）を売る店が多い

んでもないことである。他方、首都テヘランの大バーザールは非常に巨大だが、バーザールの中にあまり食料品を売り買いしておらず、日本ではおよそ買い手がつかないような「微妙な」日用雑貨を売る店が多い。もっともテヘランのバーザールの重要性は、衣料品、軽工業製品、医薬品その他もろもろの卸売の拠点として重要な役割を占めていることにある。観光地として有名なエスファハーンやシーラーズのバーザールには土産物屋が多い。この両市には外国人観光客もそれなりに目につく。もっとも、「世界の半分」と謳われたエスファハーンのバーザールも、トルコ・イスタンブルの有名なグランドバザール（カパルチャルシュ）の前には、観光客の数、客引きのやる気、怪しげな土産物の種類の多さでは足元にも及ばない。ただトルコ語では「チャルシュ」のはずが、「バザール」と呼ばれている（実は「チャルシュ」ももとはペルシア語）。この語の浸透力はたいしたものである。

もちろん、市場は屋根付きに限らない。特にイランの南にいけば、開放的な市場の風景が広がる。パキスタン、アフガニスタンと国境を接するバルーチェスターンあたりになると、地域色ある身なりの人が多くなり、隣国とのつながりを感じさせる。さらに南に進んでペルシア湾岸のバンダル・アッバースにたどり着くと、魚市場もある。ここでは、ニカーブという赤いお

賑やかなイスタンブルのグランドバザール。
客は外国人ばかりのような気が…

シーラーズのヴァキール・バーザール

テヘラン郊外のシーア派の聖人アブドルアズィーム廟の門前バーザール

ザンジバル・ストーンタウンの市場にて

ペルシア湾岸バンダル・アッバースの魚市場。
ニカーブの女性が印象的

面をかぶった女性が小売りしている（この独特のニカーブはイランではペルシア湾岸地方にみられる）。もちろん街道の屋根なし市場も、青空魚市場もみなバーザールである。

イラン国内でも地域差はある。国を越えたらなおさらその相違点は大きい。他方、別の国の市場に足を踏み入れると、「別の国」という前提があるため、共通点を探したくなるものである。たとえば平和な頃のアレッポのスーク。結構似ている。次には遠く離れた東アフリカ・タンザニアのザンジバル島にあるストーンタウンの市場。ザンジバルは古くから西アジアとの交流が盛んで、一九世紀にはペルシア湾岸にあるオマーンのブーサイード朝の支配下にあった。こちらも、全く別物とはいえない気がする。なんでも西アジア的なものを見出すのは中東研究者の悪い癖かもしれないが。ともあれ、市場めぐりはなかなかおもしろい。

平和な頃（2005 年 2 月）のアレッポのスークにて。
この少年、今は…

バルーチェスターン地方の青空バーザール

あべ　なおふみ／日本学術振興会特別研究員（PD）

イランの家族史専攻。イスラーム法のもとでのイランの相続・家族の在り方を研究。2003 年から 2006 年までイラン・イスラーム共和国のテヘラン大学に留学。